日本共産党・あおぞら豊岡市会議員団　視察報告書

視察日時　2019年10月15日～17日

視察先　　沖縄県　豊見城市及び宜野湾市

視察目的

豊見城市　1.　子供の貧困対策

2.　生活相談専用ダイヤル

宜野湾市　1.　創作市民劇

2.　健康づくり支援事業

視察者　　奥村忠俊、村岡峰男、上田伴子

○豊見城市

1.　豊見城市は沖縄本島南部に位置し、面積は19.60平方メートル（宅地・農用地等が88％山林・原野12％）、平均気温24.1度。那覇市に隣接しベットタウンとして毎年500～700人の人口増がある。資料によれば平成２年　40,777人から平成27年　61,119人とおよそ1.5倍になっている。

2.　子供の貧困対策について

①　沖縄県における子供の相対的貧困率は 29.9％となっており、全国では７人に１人が貧困状況にあるのに対し、沖縄県では３人に１人が貧困状況にある。また、大人が１人の世帯の貧困率は 58.9％であり、こちらも全国における数値と比べ極めて高い状況にある。豊見城市における子供の貧困層の割合は 18.9％と高い数値になっている。

②　沖縄県は子供の貧困対策として国の支援を受け、県内市町に対し平成28年度から33年度までの６年間を前期、後期に分け取り組んでいる。前期３年間はモデル事業（国から10/10の補助金）として実施、今年度から後期で集中対策期間として取り組んでいる。平成31年度補助金は13億円を要求している。

③　具体的な取り組み

・子供の貧困対策支援事業

子供の貧困の現状を把握し、学校、学習支援施設及び居場所づくりを行うＮＰＯなど関係機関との情報共有を行い、子供支援に繋げる支援員を中学校区毎に３名、高校進学等、主に学習支援に関する調整等を行う相談員１名、計４名の支援員を配置し対応されている。要支援者数は平成28年 273人、29年 263人、30年 259人の実績。

・子供の居場所運営事業

子供の貧困には様々な背景がある。親の離婚率も高く子供にそのしわ寄せがる。同時に将来非行に走る例も多く、それまでに子供をいかに守るかが問われており、子供の居場所づくり事業も取り組まれている。

子供達に食事提供、共同での調理、生活指導、学習指導及び就学継続等を行う居場所に運営費補助を行い３か所で実施している。３か所の利用登録者の合計数は平成28年　123人、29年　129人、30年　128人で、利用実績は28年　8,347人、29年10,197人、30年 9,787人となっている。平成30年度の事業決算額は約６千万円。

3.　生活困窮者自立相談支援事業

①　豊見城市社会福祉協議会へ事業委託、社協内にパーソナルサポートセンターを設置、専任相談員４名を配置している。相談者に対して直接面談し話を聞くだけでなく「生活相談専用ダイヤル」を設け、まずは電話での相談にも丁寧に応じている。相談者は30代～40代が多く、女性の相談者は男性の倍近くあり生活困窮者も多い。生活の支障や子供への影響は深刻である。市民からの相談は相談者に対し、ひとりひとり状況に合わせた支援プランを作成し、他の専門機関と連携して解決に向けた支援をしている。

②　具体的な内容

・自立支援事業（支援プラン作り）
・住居確保給付金の支給（家賃相当額支給）
・就労準備支援事業（就労困難者に、社会、就労に向けた支援）
・家計相談支援事業（家計再建支援）
・一時生活支援事業（一時的に衣食住の支援）

これらの取り組みによって、相談件数は毎年減少している。

○宜野湾市

1.　宜野湾市は人口およそ99,500人（令和元年10月現在）、沖縄県における中核都市である。

　第二次世界大戦では他市と同じく壊滅的な戦災を受け、市域の主要な部分が米軍基地として接収された。市の中央部に広大なアメリカの普天間基地があり、まちづくりの大きな阻害要因となっている。

　昭和60年３月には『平和都市宣言』、平成12年に日米両政府間で５年ないし７年以内の全面返還が合意されたが、いまなお広大な米軍基地が存在し続けている。

2.　創作市民劇

①　創作市民劇は平成３年「市政30周年事業」として教育委員会主導のもとに実行委員会を結成し、企画・実施している。これをきっかけに、文化振興・地域活動施策として旧13村（現在の大字）を対象に市民劇公演事業として継続されている。

②　創作市民劇は地域の人達が生活、歴史、伝承・伝統文化や文化財等を素材に創作し、芸術文化、人材発掘、地域おこし事業として実施されている。創作劇は各地域輪番で公演する。自治会が各種団体を網羅して取り組んでいる。「市民劇」に参加することで、地域の特色を再確認し、地域の誇りや人との繋がりが強まり、地域おこし及び人財育成にも繋がっている。

③　この取り組みは、演出はもちろん、題材、脚本、美術など演劇に関わる全てを地元で行っている。高齢者から小学生に至るまでの年代から希望によって参加者を募り、希望者全員が何らかの形で出演している。

④　創作市民劇の取り組みは、平成４年の第１回から平成29年の第14回実施され公演を通じて世代間の絆も育まれた。出演者は回ごとに約50名から230名にのぼり、1,200人収容の市民会館は立ち見客が出来るほどの大盛況で、地域文化・歴史を再認識する機会となっている。方言をはじめ埋もれた文化を掘り起すことにも繋がったと説明された。

⑤　公演に至るまで２年を要するとの説明があったが、それは対象となる自治会が脚本家や演出家・演出者の人材探しをはじめ、市民劇公演事業の参加協力要請と、各種団体や小中学校などの活動状況に応じ情報交換の必要があり、地域の協力体制が前提という。

⑥　創作市民劇は平成４年から平成29年までの公演をもって終了している。今後はこの事業で得たものを活かしながら事業規模、手法など検討し新たな文化振興事業についての計画を模索されている。なお、女優の仲間由紀恵氏はこの市民劇に参加したことを切っ掛けにその道に進んだという。

～～～　所感　～～～

「子供の貧困」問題は、豊岡市においても深刻な課題であるが、沖縄県では家族構成や貧困率など深刻さが増しているように思う。しかし豊見城市は市と社会福祉協議会が一体となって取り組まれており、その成果は大きく表れてくるものと感じた。

宜野湾市での創作市民劇は演劇を通じて地域住民がまとまり、年齢や性別を問わず一体となって地域の伝統・歴史、将来への展望などが育まれているように感じることが出来た。

豊岡市の城崎国際アートセンターは舞台芸術のアーティスト・イン・レジデンスとして、年間を通して国内外からアーティストを受け入れている。また2021年には兵庫県立の（仮称）国際観光芸術専門職大学が豊岡市にオープンする。これらと比較する事は出来ないが文化芸術を市民レベルでどう活かすかも大切な視点であると思った。

沖縄の風景や人々の暮らしなどはＴＶ等で見聞きしていたが、訪れて素直に『南国だ！』と感じた。気温が高く海の色はコバルト、低い山並みに沿ってコンクリートの白い建物が建ちならび透き通る青空に映える。

外国人が多く、島全体に米軍の基地が点在し飛行訓練か戦闘機が頻繁に轟音を響かせていた。

視察から２週間後の10月31日、突然ＴＶに世界遺産である首里城の炎上する映像が映った。まさかと目を疑ったがこの悲報には言葉が出なかった。沖縄を代表する施設の消失であり、全国で再建を求める声があがっている。一日も早い再建を心から願い視察報告とする。